



#02

連載「テニスに好奇心」

スポーツ用品製造販売業の草分け

美満津商店

著者＝岡田邦子

はじめの一步

テニス史を調べることは、テニスの初心を探すことと思つています。これまで機会あるごとに「ボール」やら、「コート」やら、「ラケット」やら、キーワードを変えて探してきましたが、今回は「美満津商店」を中心に据えて、明治期スポーツ史探訪を試みることにしました。

歴史探訪先での会いたい人は、美満津商店の創業者・伊東卓夫です。江戸時代に生まれて、明治初期に育つた伊東が、どのようにしてスポーツとの関わりを持ち、運動具商となつていったか。まずは明治初期ロウンテニスから足跡をたどつてみましょう。

ロウンテニスの日本伝来

イギリスで「ロウンテニス」が社交ゲームとして考案・発売されたのは1874（明治7）年、ウィンプ

ルドンで競技大会が始まったのは1877（明治10）年でした。

日本への伝来については諸説ありますが、1876（明治9）年3月4日に発行されたジャパン・ウィークリー・メール紙の記事によつて、横浜クリケット・クラブのグラウンド（現 横浜公園）で活動していたロウンテニス・クラブの存在を確認することが出来ます。同紙は横浜で発行されていた英字紙で、海外からの情報ばかりでなく、日本の政治や経済の動向、そして外国人居留地の生活情報などを掲載していました。

同年6月17日発行の同紙には「LAWN-TENNIS」と題された記事が掲載されています。場所は横浜の外国人居留地内「the Bluff Garden（現 山手公園）」の一面でした。

ここでプレイしていた女性たちが中心になってクラブを組織し、2年後にはレディース・ロウンテニスア

ンド・クロッケー・クラブ（L L T & C C）として本格的に活動を始めたそうです。

1878（明治11）年には、東京の外国人邸宅の庭でもロウンテニスが行なわれていました。アメリカ人教師家族として来日していた少女クララ・ホイットニーの日記には、横浜とともに、東京の芝、虎ノ門、そして本郷の東京大学構内でテニスをしたことが書いてあります。

いずれの場合も邸宅の庭で友たちと遊んだ様子なので、おそらく簡易なロウンテニス・セットを使つていたのでしょう。それにしても、ロウンテニスという羽根突きに似た戸外の遊びが日本人社会の目に入る機会が増えていたことが窺えます。

なお、「運動」、「スポーツ」、「野球」、「庭球」という言葉が普通に使われるようになるのは明治30年前後からです。それ以前は「戸外遊戯」とか、

「ベイス」、「ボール」、「ロウンテニス」、「ロウン・テニス」などと言われていました。しかし、以下の文中では混在して使用することになります。引用も、現代文に直してあります。

ベイスボールと「戸外遊戯」用具

ロウンテニスより先に東京の学校で行なわれるようになったスポーツは、ベイスボールでした。1872（明治5）年、第一大学区第一番中学のアメリカ人教師ホールズ・ウィルソンが生徒に教えたというこ

です。
第一番中学は、現在の千代田区一ツ橋2丁目にありました。その後、道路を隔てた向かい側、現在の神田錦町3丁目に移転し、校名も開成学校、東京開成学校と改称されます。そして1877（明治10）年には東京大学（旧制）となりますが、外国

横浜の外国人居留地、山手公園の一面で活動していたレディース・ローンテニス・アンド・クローケー・クラブのコートと、整備する日本人庭師たち。同クラブは時代の変遷を経て、現在も横浜インターナショナル・テニス・コミュニティとして活動している。また同地には横浜山手・テニス発祥記念館が建てられ、往時の服装やラケット、写真が展示されている—写真：横浜山手・テニス発祥記念館所蔵—



人教師や留学先でスポーツ経験のある帰国教師が多く、彼らの指導を受けて、陸上競技、ボート競技などが盛んに行なわれるようになってゆきました。

いっぽう、西欧の体育を導入するために文部省が開設した体操伝習所が、東京の一ツ橋、現在の千代田区立神田一橋中学校付近で授業を開始したのは、1879（明治12）年4月のことでした。幕末以来、軍隊訓練としての体操は導入されていましたが、学校授業としての体育科目を研究し、教員を養成するための教育

機関が設置されたのは初めてのことです。伝習所に招聘されたアメリカ人教師G・A・リーランドは、おもに軽体操や体力測定法、医学知識などを教えています。また伝習所では、ボートやベースボールなどの課外実習も行なっていました。

伝習所開設と同じ頃、留学先のアメリカで汽車の車両製造技術を学ぶかたわら、ベースボールに親しんで帰国した平岡潤が、勤務先の新橋鉄道局内に新橋アスレチック倶楽部を結成しました。ボールは平岡が持ち帰っていました。ボールは日本の大工に特注し、ユニフォームも工夫して仕立てたということです。明治維新から10年あまりで、まだ和装が主でしたから、さぞや目立ったことでしょう。

平岡は仲間を増やし、アメリカ留学からの帰国者や、学習院などの学生たちも、新たなベースボール・クラブを結成して試合を行なえるようになりま

す。靴屋に注文したり、手作りしたり、いろいろな作り方を試してみましたが、すぐに破れてしまいました。手頃な価格で入手できるしつかりしたボールの調達が必要になります。同じく体操伝習所でも、各学校での授業に使う体操用具類を供給できなかった。伝習所では、木工職人や皮革加工職人に輸入運動具の見本を示して国産運動具の製造を依頼し、量産を促進します。

運動具製造販売業の草分け時代

体操伝習所で必要な器具・用具類の製造を現場の職人に指示していたのは、アメリカ人教師リーランドの通訳をしているうちに自身も体操を教える立場になった坪井玄道でした。

そして坪井の持ちこんだ外国品の器具・用具類を見本にして製造したり、必要な場合は他の職人に依頼したりして販売していたのが三浦亀吉です。三浦は1882（明治15）年、神田の神保町に体操器械運動具店・潤廣堂を創業します。

国産品の奨励は、明治日本の責務でもありました。1881（明治14）年には、上野公園で第二回内国勸業博覧会が開催され、同公園内の教育博物館には教育用品が特別展示されます。体操伝習所からは写真、体操器具類、活力試験器械類、教科書類などとともに、戸外遊戯器具類が出品されました。

戸外遊戯器具の内容は、クロックケー、ベースボール、フットボールです。クロックケー用具は神田紺屋町の渡邊徳次郎製、ベースボールの球4個と打球棒2本は神田美土代町の森田金兵衛製、そしてゴム製フットボールは米国製となっています。

また、ローンテニス関係は展示されていません。

潤廣堂では、創業前後にラケットも製造していたそうです。「ラケットは初め、平板をくり抜いてもみました。棒を曲げてみたりしてどうにかこうにか似せた形を作り、それに竹刀絨や弓の弦を張ってみました」という苦心談が残っています。英語の名を冠せられた運動具では何が何だかわからないので、当時はラケットを「ロントンニス用ラケット芋すくいざる」とも言っていたとか。

体操伝習所は1886（明治19）年に廃止されますが、その役割は東京師範学校体操専修科に引き継がれ

ます。そして高等師範学校、東京高等師範学校と改称しながら体育・スポーツの形成に寄与し、現在の筑波大学に至っています。潤廣堂は弟の安藤清次郎の代になってからも、安藤商店として国産ラケットの製造販売などを引き継ぎました。

美満津商店も1882（明治15）年の創業です。創業者の伊東卓夫は自分自身を語ることが少ないので、創業の経緯はわかりません。大正期に刊行された人名録には、伊東が1860（万延元）年6月生まれで、祖父は儒者だったこと、明治初期に京都の同志社および東京の同人社で学んだことが記載されています。また、のちに伊東の長男・虎夫は次のように語っています。

「……親爺が京都の同志社を中途でやめまして、横浜に米国人の宣教師でジョン・バラという人が経営しておりました学校があったのであります。そこに在学して勉強している間に多少運動用具の知識を得た。それが動機で運動具を始めました。それがいかに私は想像するのぞきになります……」（『東京運動具製造販売業組合史』1936年刊より）。

潤廣堂、美満津商店創業の翌年には、内外人の社交の場となる洋風建築の鹿鳴館が落成します。文明開化熱が高まるなかで、F・W・ストレンジ編著『OUTDOOR GAMES』（1883年刊）、坪井玄道・田中盛業編著『戸外遊戯法 一名戸外運動法』（1885年刊）、下村泰大編著『西洋戸外遊戯法』（1885年刊）など戸外遊戯の紹介書が相次いで発行されました。

ストレンジは当時、東京大学の大学习備門（のちの第一高等学校）で英語を教えていたイギリス人教師で、同年に開催された東京大学・大学习備門合同運動会（初の本格的な陸上競技会）でも中心的な役割を担っています。

坪井の共著者・田中は、体操伝習所を卒業後にそのまま伝習所の教員になっていきます。下村泰大は、埼玉県で近代製糸業に従事した後、東京で出版社を起し、学校案内などの編集をしていました。

第三回内国勸業博覧会への出品

新橋アスレチック倶楽部の平岡

が、アメリカのスポルディング社に手紙を書いたのは、1886（明治19）年前後と思われる。平岡は、ユニフォーム姿のチーム写真を同封して日本でのベースボールについて実情を説明し、用具の必要を訴えていたことが1888（明治21）年7月15日のシカゴ・トリビューン紙に掲載されていました。その結果、スポルディング社から、商品見本として、当時のベースボール用具一式と最新版ルールブックが送られてきたそうです。

平岡はスポルディング社に直接注文ができるようになりましたが、直後の1887（明治20）年頃に鉄道局を退職することになったため、新橋アスレチック倶楽部は解散します。やがてベースボールの舞台は、学校のグラウンドに移ってゆきました。美満津商店が創業した8年後の1890（明治23）年、伊東は上野で開催された第三回内国勸業博覧会にベースボール用具を主にした製品を出品しました。

「第三回内国勸業博覧会出品目録」の「東京府第一類」に伊東が出品したのは、ベースボール用球、クロケット、クリケット、ローンテ

ニス、フットボール、鉄製重鈴、豆囊（豆を詰めた袋。体操用具）、兵式体操銃（2種類）、兵式体操用ラントセルです。

なお、出品目録には「神田区猿楽町二丁目 伊藤卓夫」と記されていますが、正しくは「伊東卓夫」であることは確認済みです。

当初、ラケットは「バット」と呼ばれていた

ほかにも東京府浅草区の寺本善三郎から「ローンテニスバット教育体操器」が出品されています。「ローンテニスバット」とはローンテニス用ラケットのことです。イギリスでもローンテニス初期には「バット」と呼ばれていました。

注目すべきは浅草区の土谷秀立らから出品されているゴム製品です。バッキング、自転車用ゴム製品などのほかに「フットボール」が出品されていますが、テニスボールはありません。土谷らはのちに三田土ゴムを創業して、一説に「明治23年、三田土ゴムが国産テニスボールの製造を開始した」と言われていますが、少なくとも明治23年博覧会には出品されていません。

明治30年7月に創刊された《運動界》に掲載された美満津商店の商品広告。銃は学校での兵式体操用。小樽から鹿児島まで、全国32の販売所が列記されている

君 諸 所 調 買 大 國 全

美満津商店

東京市本郷區本郷五丁目美満津商店謹啓

體操器械及製造販賣
動物學標本

美満津商店

他の資料から調べてみても、日本のゴム製品製造技術は、まだその段階に到達していなかったようです。ロウンテニス専用ボールばかりでなく、ロウンテニスにも使うことのできる遊戯用ゴム球もまだ輸入品でした。

なお、伊東卓夫出品の体操用具は褒賞を受けました。社会的にも、スポーツが徐々に認められるように

《運動界》創刊号に掲載された美満津商店の売り出し広告。今風に言うならば「在庫一掃、新製品準備中」という意味が丁寧に書かれている

向ヶ岡の二十の勇



《運動界》創刊号附録として挿まれた「向ヶ岡の十二勇」の写真。向ヶ岡は本郷弥生町の一高所在地。写っているのは、明治29年に横浜の外国人チームに大勝した一高野球部のメンバー。用具類はボール、バット、そして捕手のマスクとミットのみが写っている。後列の中央が明治27年に「野球」「庭球」の命名を発表した中馬庚。前列左から2人目が投手だった青井鏡男。青井は明治32年に「ロウンテニス」を著している

なっていると云えるでしょう。**「スポーツ」人気が高まり、「運動界」が発刊される**

戸外遊戯は学校体育に取り入れられ、学生や一部社会人にも楽しまれるようになりましたが、まだ運動具製造販売だけでは経営が成り立ちませんでした。伊東は馬具の製造をしていたという伝聞もありますが、運動具と同じく教育品である理化学器械、博物標本の製造販売にも従事しています。1893（明治26）年には動物標本師の組合を組織し、頭取

に選ばれていました。

1895（明治28）年、京都で開催された第四回内国勸業博覧会でも、伊東が出品した「体操及遊戯用品」は有功三等を受けています。そして、褒賞証に記載された住所は「東京市本郷区五丁目」になっていました。当時は帝国大学（のちに東京帝国大学）も、第一高等学校（二高）も、本郷に移転しています。

帝国大学の筋向かい、赤門の前に店を構えた美満津商店と、両校との関係は密でした。当時の一高野球部は、各クラブや各校との対戦に連勝

して意気軒昂でしたから、ボールやバットの品質、強度についての注文も厳しくなります。

東京では敵なしとなった一高野球部が、横浜の外国人チームと対戦したのは1896（明治29）年5月のことです。野球では初めての国際試合で一高は大勝（29対4）し、野球ばかりでなくスポーツの人気が一挙に高まりました。野球の用具についても、横浜外国人使用のものを参考にし、それまでは捕手だけが使っていたミットを、投手も使うようになります。

1897（明治30）年7月には、初のスポーツ誌《運動界》が創刊されました。伊東卓夫も幹事になり、発行支社が美満津商店に置かれます。名誉賛助員には嘉納治五郎や日高藤吉郎、坪井玄道など当時の体育・スポーツ界の大御所たちの名前が並んでいます。おまな寄稿者は東京帝国大学（現東京大学）、高等師範学校などの学生または卒業生たちでした。

庭球についても、翌1898（明治31）年に高等師範学校と高等商業学校（現一橋大学）の間で行なわれた初めての対校試合の様子や、庭



明治36年、大阪で開催された第5回内国勲業博覧会教育館における美満津商店展示の一部。手前陳列室の左側にボールやラケットが見える



明治37年頃の美満津商店
店標本部・楽器部の店舗。
体操部と並んで建っていた

明治37年頃の美満津商店
体操部の店舗。東京帝国大
学の赤門前に所在していた



明治36年頃の美満津商店所在地付近。本郷5丁目10番地、東京帝国大学の赤門前に位置していた

球の解説記事などが『運動界』誌に掲載されています。

『運動界』誌によって、わたしたちはようやく明治30年代前半のスポーツ事情や、小樽から鹿児島まで全国に広がっていた美満津商店の販売網を知ることができるようになりました。

美満津商店が「ローンテニス」を出版

『運動界』は約3年後の1900（明治33）年4月に終刊を迎えますが、美満津商店からは1899（明

治32）年に『ローンテニス』が出版されています。

著者の青井鉞男（または「鉞」は、横浜の外国人チームに大勝した一高チームのピッチャーで、執筆当時は東京帝国大学の学生でした。

『ローンテニス』の巻末に付された美満津商店の広告には、舶来品と和製の商品が列記されています。当然ながら野球用品は米国製ですが、庭球用品の中には英国製が含まれていました。美満津商店はすでにアメリカ、イギリスとの輸入ルートを使い分けていたようです。テニスボー

ルに関しては、薄い布でカバーされたゴム球も含めて、輸入品のほかに和製を販売しています。ただし、青井も書いているように、通常はカバーされていないゴム球を使用していました。

青井の『ローンテニス』に前後して、ほかにもテニス紹介書が出版されます。私立学校、大学でも庭球が盛んになり、対校試合のために共通ルールが取り決められるようになりました。明治35年頃からは慶應義塾大学、早稲田大学などでも庭球部が活動を始めます。

大阪開催、内国勲業博覧会での栄誉

1903（明治36）年、大阪で開催された第五回内国勲業博覧会は規模が飛躍的に増大し、娯楽性の高いアトラクションがさらに話題を広げました。美満津商店から教育館に出品されたローンテニス用ラケット、ベースボール、大脳模型は一等賞、人体模型、クリケット用具、クロケット用具は二等賞、フットボール、ローンテニス用具、女性人体解剖模型、人体骨格模型は三等賞を受けま

す。

さらに展示会場では天皇、皇后
両陛下より展示品についての質問を
受け、ベースボール、ローンテニス
用具が宮内省買上げとなりました。
翌年、美満津商店は顧客への感謝を
こめて『美満津商店総目録』を発行
します。目録は印刷も商品構成も充
実して、海外輸出も始まっている
様子が窺われます。

1904 (明治37) 年以降は、運
動具商の同業組合や、理化学器械、
博物標本を含む教育用品同業組合を
結成する動きもありました。しかし、
長続きしていません。時期尚早だっ
たのでしょうか。

ベースボール用具に関しては、
1905 (明治38) 年にアメリカに
遠征した早稲田大学野球部が本場の
知識と用具を持ち帰ってから、飛躍
的に進歩しました。

東洋一を誇った 美満津商店の隆盛

明治30年代からスポーツが盛んに
なっていく様子は、美満津商店発行
の出版物や商品目録にも反映されて
います。国会図書館の所蔵目録や美
満津商店の広告からタイトルを抜き

出して、出版年度順に並べてみま
しょう。

- 『ローンテニス』
- 1899 (明治32) 年刊
- 『野球年報発行ノ旨意』
- 1901 (明治34) 年刊
- 『ベースボール』
- 1901 (明治34) 年刊
- 『学校用ホッケー』
- 1901 (明治34) 年刊
- 『野球年報 第1号』
- 1902 (明治35) 年刊
- 『ピンポン』
- 1902 (明治35) 年刊
- 『癸卯之光 (一) 高野球試合の記録写真集』
- 1903 (明治36) 年刊
- 『フットボール』
- 1903 (明治36) 年刊
- 『体操器械設計図解』
- 1903 (明治36) 年刊
- 『エキセルサイザー』
- 1903 (明治36) 年頃刊
- 『美満津商店総目録』
- 1904 (明治37) 年刊
- 『魔球術』
- 1904 (明治37) 年刊
- 『最新庭球術』
- 1912 (大正元) 年刊

- 『野球年報 第14号』
- 1915 (大正4) 年刊
- 『美満津商店懐中用定價表』
- 1915 (大正4) 年刊
- 『正式インドアーベースボール規定』
- 1919 (大正8) 年刊
- 『美満津商店カタログ』
- 1921 (大正10) 年刊
- 『最新バスケットボール術』
- 1924 (大正13) 年刊
- 『卓球術: How to play pingpong』
- 1924 (大正13) 年刊
- 『最新ヴァレーボール術』
- 1924 (大正13) 年刊
- 『クロケット』
- 1926 (大正15) 年刊
- 『ヂムネジヤムとプレレグランド用
体育運動器械器具』
- 1928 (昭和3) 年刊

そのうちの何点かは、版を重ね
ています。たとえば『ピンポン』は
1902 (明治35) 年11月に初版
が、そして1918 (大正7) 年6
月に4版が発行されました。緒言に
は「有名な体操の大家坪井玄道先
生の洋行土産」として坪井が持ち帰
り、坪井の命を受けて美満津商店で
製作するようになったと書いてあり
ます。

当時、東京高等師範学校兼任女子
高等師範学校 (現 お茶の水女子大
学) 教授だった坪井は、体操研究の
ためフランス、ドイツ、イギリスに
1年間留学し、1902 (明治35)
年6月15日に米国経由で帰国したば
かりでした。つまり、帰国後半年も
しないうちに製品化され、解説書が
出版されていたことになります。

美満津商店の商品目録3点は写真
イラストが豊富で、当時の運動用品、
ひいてはスポーツの内容を把握で
きる資料になっています。1904
(明治37) 年版では製造工場の様子
や、1915 (大正4) 年版では、
海外にも出品して北米セントルイス
世界大博覧会金賞牌などを受賞して
いる様子、1921 (大正10) 年版
では「台湾、樺太、朝鮮、満州」が
販売圏に入っている様子を知ること
ができました。

二棟並ぶ社屋も、一棟は三階建て
になり、東洋一のスポーツ用品店を
誇るようになっていきます。

美満津商店のその後

大正期に入ってから体育・ス
ポーツは多種多様になります。運動



美満津製 ローンテニスラケット
MIMATSU'S GOLD MEDAL

「美満津商店懐中用定價表」(1915年刊)に掲載されている美満津製ローンテニスラケット「ゴールドメダル号」。ロンドンで発見された同系統のラケットが、現在、横浜山手・テニス発祥記念館に展示されている



晩年の伊東卓夫肖像写真。青年時代の写真を探したが、見つけれなかった

具についても販売と製造の分業が進み、輸入ばかりでなく輸出も盛んに行なわれるようになりました。合名会社となった美満津商店代表社員(経営責任者)伊東卓夫は、東京商業会議所議員にも選ばれています。

1921(大正10)年5月には東京運動具製造販売業組合が発会しました。それぞれに独立する組合員は、計70名です。伊東は組合長に推されましたが固辞し、顧問として組合の発展に尽くしました。しかし、1927(昭和2)年には顧問も辞します。

1934(昭和9)年、満73歳の伊東卓夫は評議員を引き受けていましたが、病気のため、2月12日に永眠しました。

*

長男の伊東虎夫氏が継いでから、美満津商店は株式会社になっています。ところが、太平洋戦争後になると、1948(昭和23)年に発行された「東京紳士録」に「伊東虎夫(株)美満津商店代表、文京区本郷五ノ一〇 同社」とあるばかりで、その後の美満津商店と伊東虎夫氏ご家族についての消息がわかりません。

筆者は何度か「本郷区本郷五丁目十番地」(現文京区本郷5丁目25番地辺)付近を探しましたが、手がかりを得られませんでした。資料としても、1964(昭和39)年12月、東京オリンピックの年に発行された「十周年記念 本郷五丁目町会誌」に掲載された次のような思い出話が得られたのみです。

かつて美満津商店が所在していた付近の現況。前の道路は神田から飛鳥山方面へ向かう本郷通り。今も学生たちで賑わっているが、本郷界隈が明治期スポーツゆかりの地域であったことを知る人は少ないだろう



【おもな参考文献】
玉澤敬三・編「東京運動具製造販売業組合史」(1936、同組合。1989年復刻)
佐山和夫・著「明治五年のプレーボール」(2002、NHK出版)
鳴海正泰・著「横浜山手公園物語」(2004、有隣新書)

「……次に我々の忘れることの出来ない東洋一を誇る運動具店「美満津」は、今の銀杏会館から果実店までのところにあります。店主伊東卓夫氏は今から五十年前アメリカのセントルイス万国博覧会に出品し、賞杯を獲得して各国に驚異の眼を見晴らした程で、いわば国家に貢献した方と申せましょう。明治四十年頃の「東京名所図会」には体操器械店「美満津」と出て居り……」(後藤安)

平「本郷五丁目周辺史」より

長くなりましたが、明治の文明開化期に運動(体育・スポーツ)に着目し、運動具製造販売業の基礎を確立した「伊東卓夫と美満津商店」の記憶を残したい一心で探訪記を書き進めました。この拙文が仲立ちとなつて、伊東氏ご家族についての新たな手がかりが得られることを切望しています。